

同一性・名前・指標—ギーチの相対的同一性説再考—

横路佳幸 (Yokoro Yoshiyuki)

日本学術振興会・慶應義塾大学文学研究科後期博士課程

かつて P. T. ギーチは「同一性は相対的な関係である」と主張したことで知られる。彼によれば、同一性は本来、犬や川などの実体的な一般名辞 (substantival general term) を表す概念——現代では種別概念 (sortal concept) と呼ばれるもの——に相対的に成立する関係であり、そうした概念を欠く同一性は「無意味・断片的」なものにすぎない。こうしたいわゆる相対的同一性説の利点は、対象の同定や通時的追跡についての我々の自然な態度を反映させると同時に、同一性にまつわる様々なパラドクスを容易に解決できる点にある。しかし、そうした利点にもかかわらず、この説に対してはこれまで数多くの批判が寄せられ、その結果誤った理論だという評価を受けてきた。

そうした現状に鑑みて、本発表において私が試みることは主として二つある。一つは、相対的同一性説の核となる主張およびその根拠を明るみに出し、それを現代的な観点から整理・再構成することである。もう一つは、相対的同一性説とは独立にギーチが支持した「名前における二つ区別」(および「制限された量化の還元不可能性」という考えと組み合わせることで、その説のうちには一定の説得力が備わっていると示すことである。

本発表は次の通りに進められる。まず、相対的同一性説の核となる主張は、双条件文「すべての個体 x, y について、 x と y が同じ F であるのは、 x と y がともに F でありかつ x と y が同一であるときかつそのときに限る」(F は種別概念を表す) の拒否にあることを確認する。そのうえで、こうした拒否を行う相対的同一性説を、種別概念を変項として持つような指標的文脈主義 (indexical contextualism) として再構成する。次に、ギーチによる「 F のための名前 (name for F)」と「 F の名前 (name of F)」の間の区別を確認する。前者は同一性の規準——それは種別概念によって与えられる——をフレーゲ的な意義 (sense) に含む名前である一方で、後者はそうでない名前だとされる。この区別を同一性帰属文に応用すると、指標的文脈主義としての相対的同一性説は事実上、固有名に関する現代のある特殊な立場と親和的なものとなるだろう。というのも、 F のための名前が登場する同一性帰属文の真理条件を与えるためには、同一性の関係項に当たるその名前もまた、「同じ」または「同一である」と同様に、文脈によって与えられるような種別概念の助けが必要とされるからである。このように、「誤った理論」だと一蹴されがちな相対的同一性説を、極めて特異なギーチ哲学の観点から再考・検討するのが本発表の大きな目的である。